

## 言語的カオスのクィア・リーディング： テキスト・イメージ・デザイナー

クレア・マリイ

### 1. 言語的カオス

まずは「言語的カオスのクィア・リーディング」というところから入っていきたいと思います。「テキスト・イメージ・デザイナー」というふうに副題をしましたが、出発点としているのが、『おネエことば 論』（青土社、2014年12月刊）です。『おネエことば 論』の中では、「反復するブームとしての「おネエ」」というのを取り上げてみまして、特に私は言語にいつも目が行ってしまうので、主流文化の中に吸収されていく「おネエことば」、そして吸収された後に新たにメディア言語、メディアの中で使われている言語としての「おネエキャラのことば」という現象に着目して考えてみました。

『おネエことば 論』の最後の章に取り上げたのは「モリモリクッキング」です (<http://www.plusheads.com/mc/>)。試したことある人、いますか。クックパッドとかにいくと、この2人の作品が出たりするんです。「モリモリクッキング」のレシピ、スライドにあげているのはプラスヘッズのホームページからとっているんですけれども、一つ一つクリックをしますとローズ&マリー、下のほうにいる2人の双子の兄弟の音声の流れます。これは誰を模写しているのかというのはすぐわかると思います。双子ですね。ゲイですね。ローズとマリー、合わせてローズマリーです。彼の有名な双子、おすぎとピーコを思い出させるキャラです。この「モリモリクッキング」をちょっと紹介させていただきます。『ゴールデン・エッグス』の作品から少しだけ流してみます。（『The World of Golden Eggs』（プラス・ヘッズ、2007）をビデオ上映）

これがテーマ曲です。キャストが歌ったり、踊ったりするところですね。日本語で全ての会話が流れるんですけれども、下のほうの字幕は英語です。非常に意味のない訳ですね。でたらめな訳で、これは、言語的カオスです。それがこの作品を楽しむ一つのポイントなんですけれども。テーマ曲の後にはさまざまな話が出たりします。

この作品は全て架空の街の中に設定されている話です。いわゆる青春ドラマみたいなドラマで、高校生を題材にしている作品になっています。この「ターキーズヒル」というアメリカの田舎町に住む人々の、それぞれの人生の中にあるおもしろい話が出てきます。もう一つ、この作品の中で重要なのは街のテレビ局です。テレビ局の映像は、ローズ&マリーが「モリモリクッキング」という番組を持っている空間でもあります。このテレビ局が放送するとされている番組の空間においては字幕が使われていません。字幕が出ないというのが、非常におもしろいポイントなんです。これは日本で放送されているアメリカの英語の作品をパロディ化した作品で、作品全体としては日本語で演じられていて、英語の字幕が出ているわけなんです。けれども、

作品中のテレビ番組はアニメの中の登場人物が見ているわけですから、それには字幕は必要ないということになります。おネエキャラであるローズ&マリーの番組「モリモリクッキング」の全ては字幕なしで流れています。つまり、おネエキャラのことが吸収されているこの空間においては、視聴者に向けた字幕が必要ないということです。これも、言語的カオスです。その点が『「おネエことば」論』の最後に取り上げた理由でもありました。

この理由に関してはちょっと後ほど戻ってくることにします。

## 2. 商業メディアに書かれ、視覚化される「話しことば」

さて、「おネエことば」と「おネエキャラのことば」を考えたときに非常に重要になってくるのは、商業メディアに「書かれていく」ことばという点です。私は「書かれること」に関して非常に考えさせられることも多かったため、それを中心に本を書き上げることにしました。「おネエことば」というのは音声のことばであるという主張は前からありました。新宿2丁目、あるいはそれ以前のゲイの文化の中で「おネエことば」はあくまでも「話しことば」であって、文字にすると非常にそのニュアンスが伝わらないというのが、ゲイのメディアの中での主張でした。もちろん、そういったことばが取り上げられて様々な媒体において書かれてはいたんですけども、「おネエことば」がマスコミに入ってくると、視覚化され、文字化され、そしてこういったたくさんの産物の中に盛り込まれていくのです。私はそれが「おネエことば」と「おネエキャラのことば」を考える上では非常に重要な点だと主張をしてきました。

ここで提示する作品のいくつかは、見てわかると思うんですが、全てが2000年代に活躍して、今でも活躍をしている方々の著書です(画像提示<sup>1)</sup>)。向こう側のKABA.ちゃんと山咲トオルは、少し早い段階でおネエとしてではなくて、「乙女」としてメディアに登場しています。こちら側の作品は「おネエキャラブーム」中の出版物です。『美人力』では如月音流は「おネエキャラ」というふうに出てきました。『そろそろホントの愛を』はピーコだけです。ピーコは70年代から活躍するようになったのですが、最初は「おかま」としてメディアの中に出てきます。ピーコが「おネエ」であるか否かというのはちょっといろいろ立場があると思うんですけども、「おネエキャラ」のブームの波が押し寄せる度に再びいろいろと活動するようになります。山咲トオルの『ドリームズ・カム・トオル』(2003)やKABA.ちゃんの『半分少女』(2003)には「おネエキャラのことば」がたくさん出てくるんですけども、このようにデコレーションとして使われることが非常に多いです。非常にファンシーな感じのもの、そして格式張った日本語ではなかなか使われないようなハートマークとか、そういったものが多くありますから、私ははじめは、最近の電子メディア、特に携帯メールとかパソコンとかそういったものに影響されて、このような形での出現が可能になったことばではないかというふうに推測していました。要するに、「おネエことば」は音声であったけれども、「おネエキャラのことば」はメディアに吸収され、そして今の携帯、あるいはデジタル日本語に影響を受け(またはその可能性を通して)文字化されるようになったというような仮説を、最初には立てていました。

もう一つの仮説も立てていました。その背後にあるのは、「おネエキャラのことば」がここまでメディアの中に吸収されていくタイミングによるものです。2000年代の「おネエキャラブーム」

はちょうど日本において、そして世界的にも、ライフスタイル・メディアにおけるメイクオーバーが主流になっていく時期と重なっています。このジャンルでは、メイクオーバーというのは個人の努力ではできないのです。専門知識を持った人がメイクオーバー、つまり変身していく対象となる人に、まずは変身の重要性を強調する形式をとっています。「あなたがそれじゃだめなのよ」というふうには指摘をしてから、変身の手助けをしていくというような物語の構成になっているんですけども、そのためにはまずは対象となる人を侮辱してけなしていった、どれだけだめなのかということを示した後、優しく教育していくというような、そういう物語設定になっています（Weber 2008）。そうすると、「おネエことば」は、相手を楽しくけなしていく、ゲイの、特にバーの文化の中で芽生えた言葉を借り入れて、そしてメイクオーバーの対象となる人を楽しくけなして、そして育成していくためには有効なことばだというのがもう一つ私が立てた仮説です。それは今でも有効な仮説で、その仕組みはさまざまな場面で確認できるというふうに思っています。たとえば、植松晃士、いつもこのふわふわの棒を持って、人を変身させていく「ファッションエキスパート」の彼の辛口コメントは非常にうまい。植松晃士の本『これで美人！！』（2006）の最初のところから読んでいくと、みずからを「養育係」というふうにして、自分が非常にその責任を感じているというか、その役割を担って人を厳しく育成していき、辛口コメント、暴言を吐いていくというのがポイントの一つとあります。それとは対照的に、IKKO は本や雑誌連載のみずからの苦勞を暴露していて、ブスであった自分、今でもブスでありながら活躍している自分をさらけ出し、自分自身を幸せにしていく、きれいにしていくお手本みたいな存在として位置づけています。「私ができるんだったらあなたもできる」というようなスタンスで、女性たちにみずからの美意識を高めてきれいになっていくことを提案しています。そのためのノウハウを雑誌やテレビに書いたり披露したりする。ライフスタイル・メディアにおけるおネエキャラのことばの役割はそれで説明ができます。そして、「おネエキャラのことば」はメディア言語として非常に中心的な存在になったのです。この過程において、安いバラエティー番組の中で大々的に行われるメイクオーバー・メディアが一つ重要な役割を果たしていったというのが、わかると思います。

先に取り上げた私のもう一つの仮説に戻しましょう。それは、メイクオーバー・メディアの中ではデジタル日本語、携帯の文化が、「おネエキャラことば」を可能にしたという仮説でした。しかし、調べてみると、今から30年も前におすぎとピーコがおしゃべり口調の非常にバラエティーに富んだ、それまではフォーマルな文章では書けない、あるいは書かないというふうにしてきた文体で何冊かの著書を発表しています。例えば、『女のしっぽ知ってますか』（1979）を見てみましょう。終助詞を見ると、「よ」「あ」「さ」などが使われており、文の真ん中のほうでは小さい片仮名の「ァ」を使ったりとか、感嘆符を使ったりとか、そういった今の携帯メールなどでは特徴的とされているものが、もう対談本の中には既に存在していました。そうすると私の仮説は崩れてしまったんです。けれども、ずっと気にかけていたのは、この文字化の問題、つまり音声でしか表現できないとされている「おネエことば」、当時は「オカマのことば」とされていたスタイルを非標準的な表記方法を用いて「書く」ことと、もう一つはおすぎとピーコが70年代に次々と出していく3冊の本のなかにあるイラストとの関係です。2人はラジオでその毒舌で人気になって、そしてその後、本を出していきます。当時の2人の売りというのは毒

舌なんです。とにかく、「おネエキャラのこぼし」、「おネエこぼし」には毒舌は欠かせないものなんです。これらの本では対談の形式で2人がいつもの調子で話をし、周りの女性たちにだめ出しするところが話しこぼしふうに書かれているんです。本の言語表現はもちろんのこと、挿絵も非常におもしろい。対談本の中には当時の有名イラストレーターが例えばこういったイラストを提供しています。（『こんなあたし』河村要介作・画像提示）。パンツ一枚で横たわりながら後ろに振り向く男性。セクシー？何らかの欲望の表現？「わおー、すてき」。対談の内容とイラストがうまくマッチしています。つまり、形式は違うのですが、70年代においても、2000年代においても、言語表現の表記方法も、映像・絵と文字の組み合わせもおネエキャラのこぼしのスタイルを演出するためには欠かせないのです。

### 3. 「書く」という社会的行為——テロップを書き込む

そうすると、この「おネエキャラ」ブームの中で気になっていたもう一つの点は、デジタル日本語というよりは、イラスト、あるいは映像と書きこぼしの関係です。特に、現在の日本のテレビではよく見られる、日本だけではなく韓国のメディアでもいっぱい出てくる、画面の下にある文字のテロップなんですね（画像提示）。この下にあるテロップと上のほうにある文字、これはどのように論じていくことが可能か、このテロップの役割は何なのか、そしてそれと「おネエキャラのこぼし」との接点は何なのかというのが非常に気になって、いろいろ調べるようになりました。テレビ番組の下のほうに現れるテロップというものは「字幕」というふうにも言われていますし、「字幕スーパー」、あるいは「スーパー」というふうには編集現場では呼んだりすることもあります。これは映像に出てきている登場人物の話し言葉を文字化したものです。あるいはナレーションを文字化したものです。そして上のほうのはいわゆる章題のような、タイトルみたいな感じで、今現在どういう番組であるのか、あるいはこれから何が出てくるのかというような、そういった印のような役割を担っています。設楽馨という方がテロップについていろいろ研究しているんですけども、彼女の研究によると、1980年代を境にテロップが、文字が徐々に徐々にNHKの番組においても少しずつ増えていき、そして90年代後半から爆発的にテロップという現象がテレビの中へと浸透していきます（設楽2006, 2011, 2012）。テロップが字幕スーパーと違う点は、翻訳ということではなくて、同じ言語内の文字化であるというのが特徴ですね。要するに、これを見ている人たちは聞いてわかるはずなのに、あえて文字が使用されている。見てみると、特に文字化されるのは笑いをとる場面が多いんですね。さて、おネエキャラブームの時期から一つ例を見てみましょう。

これは、『おネエ MANS』という2008年、2009年に放送されていた、「おネエキャラ」の皆さんがゲストをメイクオーバーする、変身させる、そして料理をして、買い物をして、より充実した生活が送れるように、という目的でつくられた番組なんです。クイアとして解釈可能である「おネエキャラ」を起用しながらも、『おネエ MANS』のテロップを追っていくと非常に規範的なジェンダー、そして規範的な生き方を強調している傾向が浮かび上がってきます。

2009年1月3日に放送された『おネエ MANS』は、番組のダイジェストから開始します。ロケゲスト<sup>2)</sup>の一人、女優菅野美穂が同じ月に放送がスタートするテレビドラマ『キイナ』の宣

伝を兼ねて出演しています。この場面では（映像提示）、刑事役をする菅野が『おネエ MANS』内で、普段メイクオーバーする対象となる人を捕まえるために使っているネットを発射して、はるな愛という人気コメディアンでトランスジェンダー女性を捕獲する場面なんです。テロップを見てみますと、「性別詐称で逮捕する！」とあります。『おネエ MANS』は「おネエキャラ」がメインでありながら性別不詳で、「訴えられる」存在としてはるな愛を位置づけているのは大変に興味深いんです。「おネエキャラ」を起用するこの番組ではジェンダー逸脱やセクシュアリティ逸脱をおネエキャラの言動を通して面白可笑しく表象しています。しかし、「つかまえるぞ」とか「逮捕するぞ」というのは、そのような「逸脱」は、実は、「いけないよ」ということを、強調しています。さらに、それは映像だけではなくて、そのような表現を文字として画面に「書き入れ」、投影していることで二重に強調をしているのです。

こうしたことを追っていく間に、「書く」という行為に非常に関心が向くようになりました。テロップを「書く」というのは非常に大変な作業です。このテロップを書き込む、映像に書き込んでいくというのは、最後の編集の作業では時間が1日、2日とかかるんです。まず台本があるということが前提になっています。収録されたあとの台本には、どの文字を、どのように、何色で、どのタイミング、どのスピードで、どこからどうやって回転させていくのかということが、全部載っています。編集の場にも私は何回か研究でお邪魔させていただいたのですが、和気あいあいと編集をしているスタジオと、非常に厳しい感じで編集しているスタジオがありました<sup>3)</sup>。どちらにおいても、非常にチームワークが欠かせない現場です。

「書く」という社会的行為（Sebba 2007, 2012）というのは社会言語学の中では今割と注目されているんですけども、この「書く」という、本当に書き込んでいくという行為は、テロップを読み解いていくためには一つ重要な考え方であるということ、主張しておきたいと思います。

おすぎとピーコに戻りますと、対談本における挿絵と文字の関係について、何か考えなきゃいけないというふうに思ったんです。ならばクィアにナンセンス本まで遡っていくしかないんじゃないかというふうに最近思うようになって、黄表紙を少し研究していく必要を感じてきました。江戸の黄表紙で、Togasaki (1995) は、特に山東京伝の絵と文字の関係、絵よりも文字が大切にされていた中で、その関係が対等になりつつあるのがこの時期であるというふうに言っています。そして、もう一つの見方としては、黄表紙というのはリアルなフィクションではなくて、非常に「強烈なフィクション」(Kern 2011) であるという主張です。書かれている会話というのは一見、その場にある人たちが本当に会話しているかもしれないというふうに、非常にそういう錯覚を起こすようなものなんですけれども、そうではなくて非常に「強烈なフィクション」ということです。テロップも同じように分析できるのではないのでしょうか。一見、音声で流れている会話を「再現」しているテロップは、実は、一部の発話を選択し、色・フォント・アニメなどをあしらって表現し、映像に書き込んでいくものなのです。ならば、今現在の平成のナンセンスとして、バラエティー番組を捉えることが可能なのではないかというふうに、最近少し思うようになっています。

映像と文字の新たな関係で、「強烈なフィクション性」を考えるためにもう一つの例を見てみましょう。これは2014年8月放送の『ニノさん』という番組の中での一場面です。画面は二分

化されています。出演者がお互いに携帯でメールを出し合っている映像が片側に、そしてもう片側には携帯の画面にメッセージの内容が現れるような仕組みです（映像提示）。

バラエティー番組においては、絵、そしてこれは動く絵なので映像、テキスト、フォントや色、効果音、話し言葉、そして音楽がそれぞれ重要な役割を担っています。吹き出しみたいな、考えていることというよりは、そのものの中に使われる話しことばの一部を選択して、映像メディアに書き込んでいくのがテロップをつける作業です。現在のテレビ番組ではここまで文字が映像に被さっていることが分かります（映像提示）。では、今回のテーマである、テロップを「批判的かつ批評的に」読んでいく、「クィアに」読んでいくことはどのように可能なのかについて考えてみましょう。先ほどから取り上げてきてた『おネエ MANS』であれば割と簡単なんですね。また、例を見てみましょう。

#### 4. 映像メディアに書き込まれる規範的異性愛

これは、2009年1月27日放送の『おネエ MANS』の一場面です。「韓国でのブランドショッピング」からのロケ映像をふんだんに利用しています。とある韓国の若い役者がウェイターをしているカフェで撮った映像なんですけれども（映像提示）、はるな愛は、イケメンがいっぱいいる中で、興奮をしています。でも「隣に座れないよ」、そして「さわれないよ」というふうと同席している植松兎士に注意を受けています。画面に現れる文字を読んで、わかる人にはすぐわかると思うんですけれども、はるなの「ご飯を食べながらおかずを見る」という発言を文字化したテロップは、マスターベーションを意味する、そのままの表現で出ています。これをクィアに読むことは割と簡単かもしれませんが。はるなは、視聴者である「一般女性」、つまりイケメンを好む異性愛者である女性の性的欲望を代弁することはできたとしても、みずからの行動としては表現してはならない、と批判的に・批評的に読むことが可能です。また、「韓国人男性」を消費する「日本人女性」の構図も潜んでいます。

もう一つは、クィアに読むというのは、私は規範を問う作業である、斜めに読んでいく必要があるというふうに思っているんです。メイクオーバー・メディアという、メディア自体における女性の表象などを見ると、クィアに、つまり批判的に批評的に読む重要性も確認できます。また、そうするといろんな可能性が転がっているのが非常にわかりやすいです。もう一つの例としては、2009年3月3日放送の最終回を控えた「大変身スペシャル感動編」を特集する『おネエ MANS』からです（映像提示）。この「大変身スペシャル感動編」に盛り込まれているのは、北京五輪のメダリスト伊調千春と伊調馨姉妹の映像です。金メダル、銀メダルを獲得した2人の変身のテーマは、「OLの休日風ファッション」というふうになっています。二人は変身した後、対面をするのです。これはお互いが変身して喜んでいる場面です。じつは、このような「お披露目」はメイクオーバーというジャンルにおいて重要な見せ場の一つです（Heller, 2007）。「何かしてほしいことはありませんか」と『おネエ MANS』のMCを勤める山口達也が聞いています。「お姫様抱っこ」をされたいということで、最後にはイケメンである山口が姉妹の一人ずつをお姫様抱っこします。メダリストから「OL」へ、そしてさらに「男性に抱きかかえられる存在」へと変身させられていきます。

『おネエ MANS』は、もう放送は終わっていますけれども、視聴者を獲得しようとする最後の手段は『おネエ MANS』に出て、メイクオーバーすると本当の幸せがやってくる、「あなたも結婚できる」というイメージを打ち出すことでした（例えば、2009年1月13日放送の最後の部分）。その証拠となっているのは番組中にウエディングドレス姿に変身したタレントが実生活で結婚したことです。また、番組内で発生させた生プロポーズをうけた一人が晴れて「お嫁にしてください」という場面です（2008年8月12日放送）。ここでも、メイクオーバー・メディアにおける規範的異性愛を伴う「幸せ物語」が確認できます。クィアな存在に位置づけられているおネエキャラがこのような異性愛規範を可能にしています。その演出には、おネエキャラのそばをテキストにしたテロップ、そもそものおネエキャラの身体を映すことで作り出されるイメージ、そして、変身に対する欲望が合わさっています。

さて、クィアに読んでいくと、もう一つの最近の平成のレズビアン夫婦の例にも触れていく必要があります（画像提示）。小雪とひろこ。この2人は多分皆さんご存じかと思いますけれども、東京ディズニーランドでどうしてもウエディングドレス姿で式を挙げたいと戦った2人です。結婚式パッケージをディズニーランドに申し込んだところ、断られました。だめだという理由は、1人が男装をしなければならないということでした。つまり、「一人が男性の格好をしていればいいです」という返事だったんです。けれども、二人ともウエディングドレスで式をあげたいということで、ツイッターでいろいろつぶやいていくうちに、ディズニーランド側がみずからの社員の不完全な理解であったと釈明をし、晴れてミッキーとミニーを両脇に抱えて、結婚式をすることができました。

この出来事に関する報道をまた批判的にクィアに読んでいくということを最後にちょっと試していきたいと思います。これはもちろん商品化された商品としての結婚式を買った二人なんです。ツイッター、フェイスブックなどでキャンペーンを張って、自分たちが苦勞して結婚式に至るまでの経過をアピールした。そして、メディアでも取り上げられるようになった。ここで紹介したいのは、6時台のテレビで流れたドキュメンタリー番組です（『NSta』2013年3月7日放送）。レズビアン同士の結婚式を取り上げる画期的なドキュメンタリーです。2人が着々と準備を進めていく中で、片方の元カノが、結婚式には来るのはいいんですけども、つき合っていたことを子供のために内緒にしてほしいというふうに言うんですね。そうするともう大変です。来てはくれるんですけども、つき合っていたことを子供のために黙っていてほしい。このドキュメンタリーの間に変な状況が訪れます。それでこの2人はすごく尊敬している恩師のところへ行ってアドバイスをうける。もちろん字幕が出るんです。テロップですね。テロップを追ってみてください。

このシーンでは、一人が自分が抱えている複雑な感情を表現でしています。「そこ（子供の受験）についてきたか！と思いました」とある。続いて「申し訳ないと思っちゃうじゃないですか」です。「申し訳ないと思っちゃう」はピンク、「じゃないですか」は赤。このような色の変換はテロップではよく使われています。ここで、引用は誰が何を言ったのかということにちょっと注目してほしいと思います。その次に恩師が、味方なんですけれども、「レズビアンだから気持ち悪いじゃないですか」といい、そのままテロップにされていきます。また色の切り替えが「じゃないですか」で起きています。恩師がみずからの発言に対して「はい」とあいづちをうつ。こ

これは恐らく「世間がそう言っていることを、当事者であるあなたが気にしているでしょう」という意味ですね。しかしながら、だれがいつどのように発言したのかが不明のまま鍵括弧に内包されテロップで出てくると非常にインパクトのある強いことばになります。そして次に出てくるのは、恩師のことばです。世間の中傷、バッシング、世間の差別、すべては「あなたがつくっています」というメッセージです。これも文字化されています。最後にテロップ化されて出てくるのは「“差別は自分の心の中にある”」というものです。

テロップは編集されて選ばれたことばが文字化されるものだというのを思い出してみてください。全てが出てくるわけじゃありません。編集はスムーズに流れるようにできているんです。けれども、このようなケースでは、最後に文字化されているところがむしろ、レズビアン同士で結婚式を挙げようとしている2人が頑張っって何か乗り越えようとしているところではね返されています。2人の差別意識こそが問題であるとされているのです。これがクィアに読んで行く重要なポイントです。晴れてこの2人は式を挙げるができるんですけれども、「差別は自分の中にある」というメディアのメッセージは明確に目に残る形で強調されています。

同性同士のパートナーシップの問題は、少なくとも1990年代初期からメディアにとりあげられています。実は、この記事は、わたしとパートナーが作成した初めての(同性同士の)公正証書にした「共同生活宣言」を取り上げている『コスモポリタン』の記事です(細谷1997)。女同士の式とかパートナーシップに関する問題は1990年代・2000年代にはメディアに取り上げられています。しかし、今のメディアでは、それが忘れ去られ、テロップを通して視覚化されるのは異性愛規範です。3.11以後では特に、忘却されてしまいがちであるため、クィア・リーディングを行う必要を感じます。社会的、文化的なテキストを読み解くスタンスとしてクィア・リーディングを実施していくことは、非常に大切であるというふうに痛感しています。

きょうは文学とテーマにあわせて江戸のナンセンス本として黄表紙を持ってきて、テキスト・イメージ・デザイナーを考えてきました。別のプロジェクトとしては今、3.11以後の社会をどう考えるか、どう読んでいくのかということ、4、5人ぐらいでやっています。実はクィア・リーディングは今、日本において、非常に重要だというふうに思っております。

それではこの辺で、ありがとうございました。(拍手)

## 注

- 1) KABA. ちゃん (2003) 『半分少女 僕とアタシ—KABA. ちゃんフォト & エッセイ集』 近代映画社, 山咲トオル (2003) 『ドリームズ・カム・トオル— トオルがナビする夢のゲット法』 日本文芸社, 植松晃士 (2008) 『植松晃士 愛され姫になるのよっ! 愛のない人生は女を醜くするの』 世界文化社, IKKO (2008) 『IKKO キレイの魔法— 愛され顔のメイクのレシピ』 世界文化社, 如月音流 (2007) 『美人力。キレイに生きる69の法則』 扶桑社, ビーコ (2007) 『そろそろホントの恋をしなさいよ』 成美堂出版。
- 2) 『おネエ MANS』には様々なゲストが登場する。主には、変身の対象となるゲスト、次にスタジオゲストさらに、ロケに参加するゲスト。詳しくは、番組HPを参照< <http://www.ntv.co.jp/one-mans/otoku/20090113.html> >。
- 3) 編集現場の視察に応じてくれた方々に感謝の意を表します。



## 参考文献

- Kern, A. 2011. Kabuki Plays on Page—and Comicbook Pictures on Stage—in Edo-Period Japan. In: Kimbrough, K. & Shimazaki, S. (eds.) *Publishing the Stage: Print and Performance in Early Modern Japan*. Boulder: University of Colorado Center for Asian Studies.
- Heller, D. (ed.) 2007. *Makeover Television: Realities Remodelled*. London; New York: I. B. Tauris.
- Sebba, M. 2007. *Spelling and society: the culture and politics of orthography around the world*. Cambridge, UK; New York, Cambridge University Press.
- Sebba, M. 2012. Orthography as social action: scripts, spelling, identity and power. In: Jaffe, A., Androutsopoulos, J. K., Sebba, M. & Johnson, S. (eds.) *Orthography as social action: scripts, spelling, identity and power*. Amsterdam: Mouton de Gruyter.
- Togasaki, F. 1995. *Santo Kyoden's "Kibyoshi": Visual-verbal and contemporary-classic intercommunications*. PhD, Indiana University.
- Weber, B. R. 2009. *Makeover TV: selfhood, citizenship, and celebrity*. Durham, Duke University Press.
- 植松晃士 (2006) 『これで美人！！キレイのもととは紙一重』講談社
- おすぎ・ピーコ (1979) 『女のしっぽ知ってますか』青春出版社
- おすぎ & ピーコ (1979) 『おすぎとピーコのこんなアタシでよかったら』エイプリル・ミュージック
- 設楽馨 (2006) 「テレビのトークコーナーを読む——同一の発話を伴わない文字テロップの実態——」『武庫川女子大学 言語文化研究所年報』, 18, 37-61
- 設楽馨 (2011) 「NHK クイズ番組に見える文字情報の変遷」『言語と交流』, 14, 90-103
- 設楽馨 (2012) 「NHK バラエティ番組に見る文字テロップの変遷——テレビにおける表記実態と機能の分化——」『武庫川女子大学紀要 (人文・社会科学)』, 59, 1-9
- 細貝さやか (1997) 「“ポスト結婚”時代にパートナーシップはどう変わる」『コスモポリタン』1997年4月20日 集英社

